

春
嵐
(しゅんらん)

福元
希高

陽は高く、天は一点の曇りなく晴れ渡り、地は桜の花で一色であった。辺り一帯が無数の桜花となり大河の如く流れている。幾万幾億の桜花がたゆたうように時さえ忘れて、ゆったりとうねり流れている。桜花の川であった。

……美しい。ここはいずこであろうか。

桜花の流れに見惚れ、恍惚の中に自分の存在を確かめようとした。一転、天空に黒雲かかりみるみる墨色に変化して行く。天の中央に墨痕一滴、黒い渦となって大きく広がって行き、やがて真っ黒い渦雲の真ん中に点が出現した。その点が段々眼の形に見えてくる。こちらをじっと睨んでいるようだ。人の眼のようで、人ではない。

……何者か。

射竦められて金縛りになり、もがいても、何度ももがいても、びくとも動けない。睨んでいる眼が一瞬光った。放たれた閃光が動けずにいる自分の胸を貫いた。

「おおお」

飛び上がるように跳ね起きた。一瞬の間があって、

……夢か。

と呟いた。額が汗で光っていた。

寝所の外から男の声がした。

「若殿、お目覚めにござりますか」

「うむ、起きた」

その声を確かめてから、

「入ります、御免」

若い小姓が室内に入ってきてひざまずいた。

「大きな声が聞こえました。何か夢でもご覧あそばしたか」

言われて若殿と呼ばれた少年が、

「うむ、また夢を見た」

と答えた。二人共同じくらしいの年恰好であった。

「どのような夢でございましたか」

と重ねての問いに、少年は無言でいた。話したい、夢の話を知りたい、しかし話せなかった。夢の中の、一点の鋭く光る眼が、恐怖となって話せないのか、理由は分からぬが、話すことができなかった。小姓は手を付いて、

「若殿には、本日めでたく元服の日を迎えられ、祝着至極に存じまする」

と口上を述べ、さらに続けて、

「今朝は良く晴れております。恙無く元服の儀式を終えられますようお祈り申し上げます」

「与一郎」

少年は小姓の名を呼んだ。

「はは」

小姓は答えて次の言葉を待った。

「父上のご容態はいかに」

「はい、上様には本日、起き上がれますことでしょう。またことのほか本日を楽しみにしておられます」

若殿と呼ばれた少年は、足利義藤といい、この日まだ十一歳ながら元服の日を迎えていた。側に仕える小姓は、義藤より二歳年上で、名を細川与一郎といった。義藤は色白く、瘦身で手足がやや長く見える。普段は涼やかな目元だが、何かをきくと見つめるときは、なかなか気に勝る表情を見せた。美形で感性の鋭い、口数少ない利発な少年であった。

朝食の御膳が用意され、義藤の世話をする侍女、松乃が入ってきた。白髪の老女であった。

「本日若殿様には、めでたく元服の日をお迎えられましたこと、誠

におめでとうございます」

と祝いの口上を述べた。

「松乃、母上はいかがしておられる」

「はい、御台様はお健やかにて、本日を楽しみにしておられます」

「そうであるか」

義藤は答えながらちらつと外の景色に目をやった。訊くと

「今日は、馬駆けができるか」

と与一郎の方を見て尋ねた。習い始めた乗馬だが、まだ若年ゆえに介添人が必要であった。義藤は馬が好きで、乗馬に夢中になりつつあった。

「本日は、早めに切り上げること、お約束頂ければ」

と与一郎は笑って答えた。

「ようし、今日も馬駆けるぞ」

義藤の少年らしい屈託のない顔が、喜びで輝いて見えた。

谷間の残雪の上を飛び交う鳥たちの囀りも、春の訪れを窺わせる歌声と変る頃。ここ近江国坂本でも明るい初春の陽射しが、城内の片隅にある古びた別館に差し込んでいた。寝所に主人らしき老人が、

褥の上に脇息に持たれて座っていた。この老人の名は、室町幕府第十二代將軍足利義晴、齡六十歳、病身であった。

嘗ては栄華隆盛を誇った室町幕府であったが、十一年も続いた先の長い大乱の中、花の御所も消滅し、足利將軍家もすっかり衰退、幕府の權威はとうの昔に失せてしまった。足利氏家宰の管領細川氏が主家を取って代わり朝廷と中央政權を牛耳り、今や足利氏は実力を持たぬ名ばかりの將軍と成り果て、現將軍足利義晴は、幕政の実權を握る細川晴元に推戴された傀儡の將軍であった。

武力を持たぬ義晴は京を追われること幾たび、朝には邪魔者として追われ、夕には、必要の具として呼び戻された。思えば義晴ほど朝従夕背の奸佞の輩に權力の具として利用され、権謀の中に身を置く哀れな將軍はこれまでにはなかった。それでも晴元から權力を奪い返そうと反抗を試みるが、敗れて近江坂本城主、六角定頼を頼つて落ちていった。義晴一族郎党を守護する六角定頼は、足利氏と同じ清和源氏の分流、近江源氏の流れを汲む一族であった。

落ちぶれた義晴には妻と三人の男子がいた。従臣は十名に満たない数、女房衆を入れても総勢二十余名ほどの一党となっていた。これが武門の棟梁として天下に号令できる唯一の権限を持つ征夷大将

軍の実情であった。京に戻されまた追われ、逃亡の繰り返しの義晴は、嘗ての支配下の大名や民衆の間では、同情と嘲りの混じった“流れ公方”という蔑称で呼ばれ、失意の中に病を得て臥せってしまった。

義晴は己の病が快方に向かうことなく、徐々に体力が失せていくことで、すでに命運尽きることを悟り、嫡男義藤に將軍職禅譲を決意した。年内に讓位するため、十一歳になったばかりの義藤であったが、早急に元服させることとなった。烏帽子親には、義晴、義藤父子を哀れんで庇護してくれる六角定頼に労を取らせた。

義晴の妻は近衛尚通の娘で三人の男子を儲けた。嫡男義藤、京都東山南禅寺で生まれ、幼名菊童丸。義晴は次男、三男たちは政争の具にされるのを避けるため、僧門に入れることを考えていた。のちに次男は奈良興福寺一乗院門跡、覚慶を名乗る。三男は三代將軍足利義満の造営した鹿苑寺（通称金閣寺）院主周嵩である。

義晴は嫡男義藤が元服してのち、將軍位を譲るために新しき名を用意した。義藤に将来を託し、天下人として世に光り輝くことを願って晴れやかな名を付けた。

足利義輝の誕生であった。

義晴は今日も体調優れず、元服の儀式も介添人の六角定頼に任せ、寝所で体を横たえていた。やがて義藤改め義輝が入ってきた。闘病に疲れた身を起こし、脇息にもたれて、無事元服の儀式を終え父に口上を述べる義輝をじっと見つめる義晴であった。口上を聞き終えると、

「近う寄れ」

と言った。義輝は無言で前に進んだ。やがて重苦しい息の中義晴は語り始めた。

「これよりそなたは足利義輝となった。父はもう長くはない。今そなたに打ち明けること、他人に洩らしてはならぬ。心して聞け、義輝」

義晴の目が光を帯びてきた。

「新しくそなたの近習に付けた細川与一郎は、実は足利の血を引く者だ」

義輝は無言で顔を上げ父を見つめた。

「一門である細川元常に預け、今日まで育てたのである」

義晴は義輝の反応を見た、だが義輝は口を固くつぐみ父の話の続

きを待つ。

「よいか、このこと本人も知らぬ。あ、いや、うすうす気付いておるやも知れぬが、それは表沙汰になることは無きゆえ捨て置け。良き性質に育ったゆえ、そなたのためによくよく尽くすであろう。よいか、血縁とはいえ主従の立場を崩すでないぞ」

ここまで言つて、義晴は息を整えた。

「それから二人の弟は、これより仏門に帰依する身、父の亡き後も還俗させてはならぬ。武門に向かぬ性質ゆえ仏門に入れるのだ。奸族どもの中には、弟たちを擁して政争の具に使う者も現れよう。よいな、心して弟たちの身辺を見張っておくことじゃ」

重大な言葉を一言一言噛み締めるように義輝は聞いている。

「義輝、嘗ての足利の威盛高めてくれ、わしの代で出来なかった將軍の権威を、そなたの勇氣と知恵で取り戻してくれい」

義晴の声に力がこもり、熱を帯びる。

「細川、三好に気を許すな。近づく大名をよくよく見極めよ。簡単に信ずるな。まだ幼いそなたに將軍を譲るわしの苦しい胸中分かるな。強くなれ義輝。誰も頼るな、心を許すな、己の力で強く生きよ」

義輝は一言も発しなかった。元々口数の少ない少年であったが、

父の遺言ともとれる言葉に無言で頷くだけであった。梅檀は双葉より芳し。きりつと口をつぐむ義輝は、やや色白ながらしっかりとした姿勢、もうすでに新しき將軍となる自覚と気負いが五体に満ち、凜とした尊貴の佇まいを醸していた。

そして天文十五年、この年の暮れ、初雪が根雪に変わる頃、朝廷に奏請を済ませ、清和源氏の嫡流、室町幕府の開祖足利尊氏より数えて十三世、征夷大將軍足利義輝の就任式がこの古館の広間にて執り行われた。立会人は六角定頼、義賢父子。京都、禁裏より遥かに離れた坂本の地でのひっそりとした將軍就任式であった。意外なことに、管領細川晴元は新將軍誕生を黙認したようで、京より坂本城に朝廷からの就任祝いの勅使が訪れたのであった。城主六角定頼が義輝の前に進み出て、

「恙無く就任の儀式を終えられ、誠に祝着至極にござります。これより義輝様を新將軍と仰ぎ、上様とお呼び仕ります。また臣民は新公方様とお呼びすることでありましょう」

丁重な言葉を受けて義輝は口を開いた。

「定頼殿、いろいろ大役を果たされ大儀でありました。こなたの厚

恩生涯忘れませぬ」

「おお、勿体のうお言葉、身の誉にござります。この上は一日も早くご成人あそばされ、家臣、民衆の敬慕の鑑と成られますよう、この定頼身命を懸けて御守護仕りまする」

義輝はいつものように黙して語らず、涼やかな笑顔でただ頷くだけであった。

將軍宣下の儀式も簡単に、あっけなく新將軍になった義輝は、年が明けても普段と変ることなく、城外に出て馬を駆け、憂さ晴らしをした後、自分の居室に戻ってきた。そこに見知らぬ女の姿があった。

義輝の気配に気付いた女は急ぎ下がって手を付き、

「お戻りに気付かず、ご無礼致しました」

「誰かな」

義輝が尋ねた。

「お館様の拝命により、本日よりお側にお仕えします若菜と申します」

とはっきりとした声音で答えた。若い声であった。

「余の世話をすると申すか。しかし侍女は松乃で事足りておるが」

「お言葉を返すご無礼お許し下さりませ。お側勤めの松乃様は、昨日倒れました。しかし命に別条はござりませぬとのこと。でも松乃様はお年を召されており、お側にて向後のお仕えは無理とお館様の判断にございました」

「松乃が倒れたと。年老いて辛そうなのは余にも分かっていた。そうか、定頼殿の心配りであるか、いや相分かった。若菜と申すか、春の花であるな」

「はい」

若菜は恥じらうように顔を赤くして答えた。

「余の前名義藤、幼名菊童丸、藤も菊も春に咲く花であるぞ」
言うてから義輝は照れくさそうにくすつと笑った。

「ほんにそうでございます。」

若菜は眩しげに義輝を見つめた。

「この土地で生まれたのか」

「はい、坂本で生まれました」

と若菜はにこつと微笑んで答えた。

「若そうだな」

義輝は自分の歳に近いと思った。

「この春で十七になりまする」

義輝は棚上の花器に供えてある花に気付いた。

「そなたが活けたのか」

「はい、お城の外で見つけて参りました」

「水仙か」

「はい、春らしき花で上様のお心が晴れますよう、活けてみました」

「余は水仙が好きだ、春花では特に水仙が好きだ。いや、春が好きなのだ、そなたはどうだ」

若い女の声に義輝はいつになく声を弾ませて言った。

「はい、私も春の花が一番美しいと思います」

京を逃れ、坂本で呻吟する父義晴の無念な思いを引き継いで、義輝も鬱々と重苦しい日々を過ごしていた。そんな時、ふと見る若い女と春を告げる水仙に、義輝の心はいつしか和んでいた。

この日から若菜が、義輝の身の回りの全ての世話をすることになった。食事の世話から髪結いまで、甲斐甲斐しく侍女としての勤めをこなしていく。まだ少年の義輝は、細事によく気の付く、心の行き届いた世話をしてくれる年上の若菜に、姉のような親しみを覚えるようになっていった。

義輝はいつの日からか、時折悪夢に悩まされていた。いつも同じ不吉な夢が、義輝のまだ成長前の心に傷を付けるようであった。だがそのことは、父母にも松乃にも打ち明けてはいなかった。もしやこの若菜になら話してもよいか、と考えてみた。しかしやはり義輝は話すことなく時が流れていった。

その頃、京の都にて、公方に成り代わって幕政をみる管領細川晴元は、邸館の奥院で苛立っていた。

細川晴元は、父澄元が急逝したため、七歳で家督を継承した。家臣であり実力者の三好元長らと挙兵し、宿敵細川高国を攻め、第二代將軍足利義晴共々近江に追い落としした。追い詰められた高国はこの後自害して果てた。時待たずして晴元は第十代將軍足利義材の養子義維を推戴し、將軍位に就かせようとしたが朝廷との不和でこれを認められず、これが原因で義維を疎ましく思うようになっていた。

「あの堺公方、暗愚で物の役に立たぬは」

晴元は義維の顔を思い浮かべて、吐き捨てるように言った。堺公方とは、和泉堺に本拠を置く義維への世間の呼称であった。後にな

って義維は、阿波に追放され阿波公方と呼ばれるようになる。第十四代将軍義栄はこの義維の子である。

義維は自分を疎んじる晴元に対抗するため三好元長に助けを求めた。武力を誇る三好元長は、主家細川晴元と敵対するようになり、とうとう打倒晴元の反旗を掲げ挙兵した。だが機略に長ける晴元は、一向宗総本山石山本願寺証如と手を結び、一向一揆を先導して三好元長を堺で殺害するに至った。この後、堺公方義維を阿波に追放した晴元は、中央政権維持のため足利義晴との和睦を考えた。細川晴元の特命を持って、密使が近江坂本にやってきた。

新御所様（将軍）と大御所様（前将軍の尊称）を京にお迎えしたいとの内容であった。保護者の六角定頼は嫡男義賢と密議の後、これを受け入れることにした。六角父子がそうであれば、義輝もこれは受け入れざるを得ない仕儀であった。只一つ気がかりは父義晴の病状であったが、このことを伝えると、

「有難や、わしの願いは、せめて京にあつて最期を迎えたい」

老齡の義晴は、京への復帰と聞いてこれまでの態度を一変させた。

「父上も老いたな」

義輝は呆れながらも、少しばかり体調が持ち直してきたようにも

見える父義晴の願いを受けて、足利晴元の誘いに応じることにした。

坂本を離れ、京に出立の日。義輝は六角定頼、義賢父子に、丁重にこれまでの感謝の礼を述べた後、居館を発つ前に若菜と別れの言葉を交わした。別離の悲しさか、若菜は目に涙を浮かべていた。

「若菜、世話になった。忘れぬぞ」

「上様、何卒ご健勝であらせられますように」

涙を堪え、若菜が答える。義輝は若菜の涙を見て声を詰まらせた。

「余はそなたに話しておきたいことがあった。しかし時が無い。いづれまた、あいまみえたとき、ゆっくり話そうぞ。別れは辛いものだ、堅固で暮らせ」

「有難きお言葉、またおめもじを夢見ておりまする」

「おお、また会おう、さらばじゃ」

義輝は自分の涙を、若菜にも従臣にも見せたくなかった。気丈に笑顔を作り道中の人となった。

京都、二条本覚寺に宿営した義輝一行は、ひとまずそこに落ち着き、義輝は晴元と対面した。

「これはこれは、新しき御所様。晴元にござる」

長身の晴元は腰を大きく曲げて義輝を迎えた。

「元々我が細川家は足利公の家臣でござる。戦国の常とはいえ、意見の違いで御先代義晴様とは心ならずも干戈を交えましたが、日々心を痛めておりました。ここに和議整い、心が晴れるようござります」

上機嫌で満面に笑みを作り晴元は話しかけた。

「晴元殿、これまでの瑕瑾は問わず、水に流すゆえ爾今よろしくお引き立て下され」

「おお、有難きお言葉。お忘れ下さるか、忝かたじけない。向後手を取り合うて天下万民の為、働きましようぞ」

両者、腹の内は見せずに無事対面の儀式は終わった。これよりこの二条本覚寺が將軍家の仮御所となった。

「上様、先ずは京に落ち着きましたる段、祝着に存じます。この上はかの御仁には心を許さぬよう、お心がけなされませ」

と側近の細川与一郎が声を潜めて話しかけた。この与一郎は、義輝の前名義藤から藤のひと一文字を拝受し、細川与一郎藤孝と称していた。

「分かっておる。努ゆめゆめ々気を許すものか」

義輝は、将軍という存在は京に在ってこそ生きてくるもの、京に在ってその地位が確立され、力が生まれるものと確信していた。

……将軍というものは、なにがなんでも京におらねばならぬ。天子様のお膝元で政を司る。これでこそ将軍なのだ。京を離れてはならぬ。不運が巡ろうが断じて京を離れず。

そう心に決める義輝であった。

「余は力を付ける、強くなるぞ」

義輝は与一郎に力強く言い放った。

一方の晴元は、

……あの小童に武力を持たしてはならぬ。

晴元は義輝を一目見て、大将の器と見抜き警戒を怠らなかった。

この時期、管領職細川晴元は山城、摂津、丹波の守護職であり、右京太夫に任官し幕政を支配していた。だが百年の長きに亘る戦国の世は、そうそう一人の実力者に長い実権を持たせなかった。嘗て、晴元が追い込んで自害させた細川高国の養子氏綱が、打倒晴元を掲げて挙兵した。氏綱は畠山政国、遊佐長教らと結んで密かに将軍義輝に接近してきた。

「余はいまだ若年、武力を持たぬ身なればいかんとも成し難し。時が必要なり、時至れば大願成就しようぞ」

義輝は、父義晴存命の内は、己の野望は胸に秘め、ひたすら来るべき時を待つのであった。だがこの秘密が洩れたのである。氏綱が義輝を擁して中央政権を乗っ取る画策が晴元の耳に入った。激怒した晴元は、氏綱討伐の号令を発した。そして事もあるうか義輝、義晴父子を再び近江坂本に追放した。またしても坂本城主、六角定頼、義賢父子の庇護を受ける身となった義輝は、己の不甲斐なさに身をよじって嘆いた。

……力無き自分が情けない。將軍である身が恥ずかしい。

毎日毎夜悲嘆に暮れていた。挫折感と孤独の葛藤の中、体だけは成長する義輝であったが、時折見る悪夢は続いていた。不吉な夢に悩まされる義輝は、嘗て身の回りの世話をしてくれた侍女若菜を探した。しかし、義輝が京に向かった後、暇いとまを乞い城中から姿を消していた。

……逢いたい。

義輝は心底そう思った。しかし今の自分は若菜を呼び戻せる立場ではないことを知っていた。

……諦めるしかない。

義輝は心の中で自分に言い聞かせた。

京都では、政権を巡っての権力闘争の異変が続いていた。

晴元に堺で殺害された三好元長の嫡男長慶は、家督を継いだ後、

晴元に恭順の意を表し臣従していたが、とうとうここに来て細川氏綱と結んで寝返ったのである。狡知に長ける三好長慶は細川氏綱と共に畿内一大勢力を築き、晴元を脅かす存在となっていた。追い込まれた晴元は、朝廷の仲介が必要となり、將軍義輝を再び京に呼び戻す決意を固めた。うまいことに三好一族と六角家は敵対関係にあった。晴元は六角定頼と和睦し、味方に引き入れることに成功した。こうしてまた義輝は病気の父義晴共々、京に迎えられたのであった。

だが義輝の不運は続いていた。斜陽の管領細川晴元は、大敵となった細川氏綱、三好長慶連合軍に江口に於いて決戦を挑む。敗れた晴元は、こともあろうか義輝、義晴父子共々近江坂本に逃れる有様であった。

「やれやれ、またしても落ちられたか」

六角定頼、義賢父子も、この頃はもう呆れて、苦い顔を隠そうともしなくなっていた。義輝は運命に弄ばれる自分に嫌気がさしていた。

…強くならねば、たった一人でも強くなりたい。

心中そう思い込む日々であった。この辺りから父義晴の様子がおかしくなっていた。義晴はすっかり気落ちして起き上がることも叶わず、いよいよ終焉を迎えた。

天文十九年、第十二代將軍足利義晴は失意の中病没した。義輝、十五歳の時であった。

天文二十一年、京に於いて実権を握った細川氏綱の特使が義輝のもとにやってきた。氏綱を新しき管領に任命することを条件に義輝を京都にお迎えする、という内容であった。義輝はこのことを定頼、義賢父子と他所にて過ごす晴元に伝えて返事を待った。やがて六角義賢が合議の結論を義輝に伝えた。

「上様には京におわせられて時を計るべし。我ら六角家と晴元殿とは、近い内に兵馬を整えて上洛いたす所存。それまで朝廷のお膝元におられる方が得策かと愚考仕る」

義輝の身を慮おもんばかつての言いようにも聞こえるが、体のよい厄介払いのようにも取れる。義輝は運命に逆らうのをやめた。

「余は父子二代に亘る流れ公方である。どこへでも流れようぞ」

捨て鉢の義輝の言に義賢は、

「あいや、必ず御膝下に馳せ参じます。今ひと時のご辛抱にござる」

三好勢と雌雄を決するには、六角家はまだ力不足であった。こうして三度京みたびに上った義輝を、細川氏綱は狂喜して迎えた。

「おお、おお、よう上られました。御所様、これよりはこの氏綱を頼られよ」

歓迎を受けた義輝は、早速朝廷に奏上してのち細川氏綱を新管領に任命したのであった。

この年、越後の武将長尾景虎が、雪解けを待って上洛してきた。

関東管領の上杉憲政が北条氏に追われて景虎に助けを求めた。景虎は憲政を支援し、それが縁で上杉憲政の家督を継ぐことになった。

関東管領職は將軍義輝の承認が必要であった。そのために上洛して、二条御所義輝に拝謁したのである。

「音に聞く越後の猛将、長尾景虎、遠路はるばる大儀であった」

義輝が想像していた景虎とは違っていた。目元涼やかで、やや色白だが若々しい精悍な武将であった。なんとなく義輝に容貌が似ていた。景虎も義輝を上目越しに見て、まだ少年の將軍に戸惑いを見せていた。

「御目通り叶いましたる段、恐悦至極にござります。長尾景虎にござります」

「予想したより若いな景虎」

「恐れ入ります。まだ若年にござればご無礼の段、お許し願いまする」

「いや良い、関東管領上杉家の相続について参上したのであるな」

「御意」

「上杉を名乗るのであるな」

「お許しあれば、上杉政虎と名乗る所存にござります」

「相分かった、余は難しいことはまだ未熟ゆえ分からぬが、願いのむきは必ず聞き取らす」

「有難き仕合せ、上洛の甲斐がござりました」

義輝はこの清々しい戦国武将に好感を持った。越後の雪深い国か

ら遙々はるばるやって来た長尾景虎を、短い時間であったが義輝は歓待して楽しく語らうのであった。

長尾景虎は京に滞在中、内裏に参拝し、時の帝、御奈良天皇に拝謁、朝廷より従五位の下、弾正少弼に叙任された。そして義輝の承認によって関東管領職となり、上杉政虎となって越後に帰っていった。

……いつかまた会いたいものだ。あのような信義に厚い武将に、上洛して自分を補佐して貰いたい。頼もしい武将上杉政虎。

義輝は今置かれている己の立場に歯噛みする思いであった。

義輝の流れ公方の運命はまだまだ続いていた。翌年、六角定頼が嫡男義賢に家督を譲ったのを機に、義賢が晴元と組んで兵を挙げたのであった。だが、氏綱の腹臣、三好長慶の前に敗れ去った。こうして細川晴元政権は崩壊、政争の舞台から消えていった。

後世、戦国時代の下克上体現者の一人と言われた奸雄、三好長慶は、これより全ての実権を掌握、やがて氏綱から力を奪い去った。氏綱は全くの無力となり、長慶の傀儡となった後、摂津淀城に幽閉され、失意の中死去した。義輝は抵抗する六角勢の味方とみなされ、

またしても長慶によって京を追われたのであった。坂本城内にて身の縮む思いで座り込む義輝に、六角義賢は、

「上様、案ぜられまするな、まだ負けたわけではござらぬ」

慰めの言葉も義輝の耳には虚しく響いた。

永禄元年。

三好長慶から和睦して京に戻られよという特使が義輝のもとに参上した。何を思ったか六角義賢は三好家と敵対する愚を避けるためこれに応じ、義輝をまたもや京に送り届けた。ところが意外やその直後、再び六角義賢が三好長慶に反旗を翻した。三好長慶は、義輝の居る御所に上り、

「上様にはこの長慶が信ぜられませぬか」

と問うた。

「余は武力を持たぬ、よって誰にも加担できぬではないか」

「仰せの通り、では六角氏に担がれることのなきように、お静かに事態の推移を見守られますよう」

「相分かった、おことの武運を祈るぞ」

言われる通り、事態の推移を見ていた義輝であったが、流言が飛

び交い誤解が生じた。義輝が義賢と密かに結んだという噂が現実味を帯びて長慶の耳に入った。

「小童公方、小賢しき調略なり」

長慶は実弟の実休に檄を飛ばし、六角勢を撃破。六角義賢は坂本城に逃げ帰った。残忍な長慶は、

「懲らしめてくれる、その名の通り流れ公方となれ」

またまた、京から義輝は追放されるのであった。さらに追い討ちを掛ける如く、坂本城の義賢から伝令が届く、

「無念ながら、もうこれ以上の御守護は致しかねます」

とうとう支援を打ち切られ、見捨てられてしまった。途方に暮れる義輝であったが、捨てる神あれば拾う神あり、近江朽木谷領主、朽木植綱が救いの手を差し伸べた。

「なんとお勞^{いた}しや、武家の棟梁たる高貴の御身分にあらせられるに、これはお辛き事態、当家にてしばしご逗留あれ」

朽木氏は近江源氏の分流で、辿れば義輝と同じ清和源氏に辿り着く家柄である。朽木植綱は温厚な老人であった。義輝を哀れに思い、義輝主従のために、朽木館の近くに新しく邸館を建ててやった。ひとまずここに落ち着いた義輝は、この地にて束の間の平穩を得る喜

びに浸った。

「上様、暫くはゆっくりお休み下さりませ、いずれ幸運が巡って参りましょう」

いつも側近くに仕える与一郎藤孝が、慰めるように話しかけた。

「与一郎、余は何もかも疲れた、一人にしてくれ」

与一郎は平伏すると静かに退いていった。

……今宵もまたあの忌まわしい夢を見るのだろうか、自分は夢の中でも無力である。力が欲しい、強くなりたい、一人でも負けぬ、孤独にも負けぬ力が欲しい。

義輝は一人夜の白むまで悶々と考え続けた。

朽木谷は坂本より幾分春が早いようだ。義輝は気を紛らすために乗馬を楽しむことにした。そして、今朝も細い谷間たにあいを馬で駆け抜けていた。

……誰かいる。

山道の先、曲がろうとする前方に人影を見た。義輝は馬を止め、静かに、用心深く、駒を進めた。背後より追いついた側近与一郎が、

「上様、ご用心めされよ」

と声をかけてきた。

山道の曲がった先に一人の影、ゆつくりと主従は近づいた。女であつた。若い女が跪き片手を地に付けて拝礼していた。

「何者か、面おもてを上げよ」

義輝が与一郎より先に声をかけた。若い女が顔を上げた。見覚えのある女の顔であつた。

「そなた」

義輝の眼が光った。

「若菜、若菜であるな、間違いない」

「上様、若菜にござります、お懐かしゅうござります」

「おお、若菜、懐かしいぞ、息災でいたか」

「はい、上様もご健勝にて、また一段と大きゅうなられました」

若菜が嬉しそうに、眩しげに義輝を見上げて、大きな笑みを見せた。馬から降りて、義輝は手綱を与一郎に渡すと若菜の側に寄つた。

「余は辛酸を舐めても、この通り体だけは大きゅうなる。そちは変わりにないか」

と嬉しげに話しかけた。

「いろいろありまして、今はこの地に住んでおります」

「いや、息災なればそれで良い、話したきこと山ほどあるぞ、館に参れ、積もる話をしようぞ」

声を弾ます義輝を、若菜も嬉しそうに見つめていた。ふと義輝は若菜の左手の地に置かれた花に目をやった。

「や、その花は」

「水仙にござります」

「おお、水仙、余の好きな花」

「以前も上様はそう申されました。春の花では水仙が一番好きであると」

「覚えていたか、その通りである」

「あとご自分の前のお名前も、春に咲く花であると」

「ははは、嬉しきことを言うぞ」

義輝は声を上げて笑い、重い鎧を脱ぎ捨てたような身の軽さと心地良さを感じていた。春の日差しが三人に降り注ぎ、平和なひと時を包み込んでいた。

館に若菜を連れて戻った義輝は、若菜と今までの置き忘れてきた時を取り戻すかのように、長きに亘り話し合った。今置かれている自分のことを話し、何故若菜が朽木谷にいたのかを問うた。若菜は

昂ぶる気持ちを抑えて義輝に話した。両親が急死し、一人になったため朽木谷に住む母方の祖父母を頼り、家の下働きをしていたこと、義輝がこの地に逃れて来たことを知り、谷に入り偶然巡り逢えたこと、全て水仙の花のお導きであると信じたこと、それらの思いを義輝に伝えた。

「水仙か、良い花だ」

義輝はしみじみ若菜を見つめて呟いた。義輝は、初めて若菜をこれほどまでに愛おしく思う自分に気がついた。

「もう訳は聞かぬ、余はそなたが必要である、以前のように側にいてくれぬか」

「御領主様のお許しがあれば喜んでお仕えます」

答える若菜の顔に喜びの色が浮かんでいた。

近江朽木谷にて世を忍ぶ暮らしは、予想を超えて長きに亘った。その間にも若菜は侍女として誠心誠意、義輝の身の世話を焼いた。義輝は若菜に、鬚の手入れ、髪結いをして貰うのがことのほか好きであった。若者に成長し、多感な時期を迎えた義輝は甲斐甲斐しく働く若菜にいつしか淡い恋心が芽生えるのを感じていた。若菜も薄

幸の境遇にある年下の義輝に同情が募り、愛おしさに変わる自分を感
じ始めていた。

或る夜、寝所の灯りを用意する若菜を見て、義輝はこれまで心に
溜めていたあることを話してみようと思った。

「若菜、そなたに初めて打ち明ける、聞いてくれるか」

義輝は意を決して話した。

「はい、伺いまする」

「余は時折であるが悪夢を見る、それも、いつも同じ夢だ」

「上様、悪夢とは、どのような夢でございましょう」

「それが話したくても話せないのだ、なぜか分からぬ、話すことが
できず、これまで誰にも打ち明けたことがない」

「いつも同じ夢なのでしょうか」

「そうだ、いつも同じ不吉な夢だ」

「この私にも話すことできませんか」

「いや、そなたになら話せる、以前からそう思うようになっていた」

「上様、この若菜、すっかり上様の悪夢を受け止めましょう、お話
し伺いまする」

義輝は深呼吸を繰り返し、息を整えてから、恐る恐る、探るよう

に語り始めた。

天上は一点の曇りなく晴れ渡り、地上は幾万幾億の桜の花の大きな川、ゆったり流れる桜花の大河。悠久の時の流れの中、美しさに魅入られている自分。一転、晴天の天上が俄かにかき曇り、墨色の雲が広がって行く、中心が真っ黒い渦雲となりその真ん中に点が生じ、やがてそれがこの世の物とも思えぬ眼に変化する。その得体の知れぬ眼に睨まれて身が竦み金縛りになる、そして眼から放たれた閃光がこの身の胸を貫く。恐怖と激痛で夢から醒める。これらの一部始終を、義輝は一つ一つゆっくりと語った。悪夢から醒めたときのように、義輝の額に汗が滲んだ。

「桜花の大河……渦巻く黒雲……眼の光……」

若菜がじっと考えながら呟く。

「若菜、分からぬともよい、初めて他人に夢の話ができた、余はそれで満足である」

「上様、その眼は人の眼ではないのですね」

と若菜が尋ねた。

「あれは人ではない、姿は見えぬが人ではない」

「このこと、よくぞ私にお打ち明け下さりました、私なりに日毎考

えますゆえ、何卒お心休まれますよう」

「うむ、有難いぞ若菜、そなたに打ち明けてなにやら安堵した、話せて良かった。不吉な悪夢に悩む余は、さぞかし意気地なしと思うであろうな」

「滅相もございません、上様がお若き身で、これまで幾多の苦難にも負けずに立ち向かうお姿を拝し、上様は誠の武門の棟梁、将軍様に相応しいお方と思っております」

「そなたの励まし、心強いぞ」

「私はいつも上様のお側を離れませぬ」

義輝は若菜に夢の話打ち明けたことで、なにか心が休まる思いがした。

若菜との再会から楽しき日々を取り戻した義輝は、与一郎を相手に刀術の稽古を始めた。強くなりたい一心から思い立ったのである。しかし、朽木谷家中には将軍にしっかりと指南できる適任の刀術家はいなかった。義輝はそれでもめげずに、毎日必ず木刀を振るって自己流ながら体を鍛えた。山歩きをし、野を馬で駆け、木刀を振るい、書物を読む、そんな日々が過ぎて義輝は、段々と逞しい青年に成長していった。

年号が変り永禄元年、義輝が二十三歳になった年、近江坂本から六角義賢が朽木谷を訪れた。久し振りに義輝に拝謁した義賢は、挨拶の口上を終えたのち、

「京の三好長慶殿より、それがしを仲介として、上様と和議整えたしとの要望がござりました」

「また和睦して京に上れと申すか」

義輝は義賢を睨み付けた。

「御意、長慶殿の真意は測れませぬが、將軍家が帝のお膝元におおすは、天下万民にとって目出度きこと、ここは恩讐を捨てご勘考あつてしかるべしと進言仕ります」

京にあつて、長慶は実力者であつてもなんの幕府の要職、地位に就いてはいなかった。近隣の戦国大名を懐柔したり屈服せしめたり臣従させるには、官位叙任が手段であり、家臣の箔付けのため位階の授与も必要であつた。それら官職、官位任免の権限は、今は名目だけとはいえ將軍の専権事項である。長慶は京に義輝を迎える代わりに、自分を幕府の御相伴衆に加えること、官位修理太夫に推挙すること、などの条件を仲介の労を取る義賢に伝えたのであつた。義

輝は庇護者の朽木植綱と重臣たち、そして側近与一郎藤孝も加えて合議の上、ここは義賢の進言を受け入れ和睦に応じて上洛する決意を固めた。

義輝は年老いた生母慶寿院にもこのことを告げた。

「私は老いの身なれば、そなたに従います」

慶寿院も京に同行することを承知したのであった。あとは若菜である。義輝は若菜とは離れたくなかった。

「若菜、そなたは余にとって大事な身、一緒に京に行ってはくれぬか」

「勿体ないお言葉、この地にて上様の御身を案じて過ごすより、お側にてお役に立ちとうございます。何卒お連れ下さりませ」

若菜が目を潤ませて義輝に告げた。

朽木谷を発ち、再び京都に上った義輝主従は、旧本覚寺、二条御所に宿営したのち、禁裏に参内した。その後、三好長慶と対面して幕府御相伴衆に任命し、官位修理太夫を授与した。そして義輝は、將軍復権の大願を胸中深く秘めて、御所に入り好機到来を待つのであった。

「与一郎よ、今は実権を握る長慶の傀儡にすぎないが、必ず將軍の権威を復活させるぞ、これは父の悲願でもある」

「上様、あまり表立ってはなりません、かの御仁は用心深く、狡猾で手強い相手、慎重になさりますように」

「よう分かった、先ずは自分が強くならねば、誰ぞ刀槍師範を探してくれい」

「畏まりました。広い都ゆえ必ず見つかりましょう、探してみます」
「長慶に斡旋させよ、あの者に信頼するふりを見せるのも良い案と思うが」

「なるほどそれは面白いお考え、では早速にも」

長慶は、將軍義輝の兵法師範の斡旋依頼を喜んで受けた。

「流石は御所様、武門の棟梁はかくあるべし」

長慶の命で、京都四条西洞院の辻に道場を開く、京八流吉岡派吉

岡憲法直元という剣客が二条御所に参上した。京八流とはその昔、

鞍馬寺の剣僧が編み出した鞍馬八流を、京都一条堀川に住む陰陽師

鬼一法眼がさらに研鑽を重ね、京八流として興した剣法であった。

それを吉岡憲法直元が新たに秘奥を取り入れて京八流吉岡派を立ち上げた。畿内一円では京を代表する剣法なので京流とも呼ばれてい

た。

御所の庭園内に新しく設けられた武道広場で、義輝は吉岡憲法に謁見した。

「義輝である」

「初めて御意を得ます、吉岡憲法直元にござります」

跪いて憲法直元が答えた。中肉中背ながらがつしりとした体軀、口髭を生やしたいかつい男であった。

「早速始めようぞ」

庭園内武道広場にて、義輝への吉岡憲法の剣術指導がこうして始まった。

「上様は尊貴の身におわしますれば、攻めの刀法より小太刀にて受けの型、防御の秘太刀を御教示仕ります」

そう言うってから幾通りの守りに徹した型を教え始めた。

「あいや、その型はこう、力を抜いて、こうでござる。今度はその構えが今少し悪しゅうござります、こう、こうでござる」

型ばかり強要して、双方構えての打ち合い、撃剣にはならない。演武にて演舞のようなものであった。

「通常の木刀にて、向かい合って打ち合う型はないのか」

義輝は拍子抜けしていた。朽木谷では毎日木刀を長時間振って体はできている。義輝は、この型ばかりに気を入れる指導に一寸不満気であった。

「上様は將軍でおわします、真劍や木刀にて打ち合う兵士の劍法は不必要と心得ます。御自ら太刀を振るって敵を斬ることは避けねばなりません。小太刀にて身を守るのは最後の手段、その危険に身を置かぬことこそ肝要かと心得まする」

「ふむ、申すこと道理である」

義輝は納得してみせたが、内心は不満であった。

この日から、京人流吉岡派吉岡憲法の盛名がまた一段と洛内に広まっていった。四条西洞院の辻、吉岡道場の門前には新たに大きな看板が掲げられた。そこには「室町幕府兵法所京流吉岡憲法道場」と墨痕淋漓に書かれていた。將軍師範の憲法直元の名を慕って、畿内だけでなく遠方の地からも武術指南を求めて武家の士卒が続々と入門し、活況を呈していった。だが憲法直元が突然倒れた。半身不随となり、再起は望めぬ身となってしまった。一門保持のため、直元は実弟直光に家督を譲り、憲法を襲名させた。これにより初代直元から二代憲法直光が一門の総帥となった。この二代憲法直光が将

軍義輝の兵法師範を引き継いだ。直光も兄と同じように口髭を蓄え、いかつい体躯で、せつせと義輝に守りの型だけを強制する。義輝はうんざりしてきた。

「余は剣士として腕を磨きたい、自ら戦場に出ずとも剣客の使う技を覚えたい、一人でも強くなりたいのだ」

義輝は若菜と二人になったとき、そう言つて愚痴をこぼした。

義輝はこの頃になると、若菜への思慕が益々強くなっていた。孤独な義輝にとってはかけがえのない相談相手であり、日々の暮らしの中で必要欠くべからざる存在となっていた。何度若菜に熱き思いを打ち明けようかと迷う日々であった。しかし、己を律することで、若菜との清い関係を維持する方が、自分にも若菜にも最良であると信じて節度を保っていた。

或る日御所内書庫で、掃除と書物整理をしていた若菜が、ある書物の中から、唐人が描いたと思われる四枚の絵画を見つけ出した。

誰かが写したものであろうか、元々古寺であるこの御所の所蔵画であろう、水墨画には解説文が添えられていた。暫くそれを読んだ後、若菜は、居室にて書を読む義輝に茶を運んだときに話しかけた。

「上様、今はお話しできましようか」

「うむ、何かな」

義輝は優しく若菜に笑顔を見せた。

「私はいまだ上様の夢が気掛かりですが、まだ時々見られましようか」

「うむ、実は昨夜も見た、同じ夢だ」

「そうでしたか、実は先ほど書庫で四枚の写し絵を見ました」

「寺の所蔵画であろう、それが如何いたした」

「はい、上様のいつも見られる夢は春の景色でございましょう」

「そうだ、大地の全てが桜の花の大河で始まるのだ」

「春にも守護神の存在があると初めて知りました」

「その絵に描かれていると申すか」

「はい、春だけでなく四季の全てに守護神が」

若菜はその四枚の水墨画には、四方位の守護神がそれぞれ描かれていたことを義輝に説明した。添えてある説明文によると、四季には色があり、そして四方位がそれに当てはまり、四方位に守護神が座る。即ち、青春・方位は東・守護神青龍となり、以下、朱夏・南方・朱雀、白秋・西方・白虎、玄冬・北方・玄武と当てはまる。若菜のここまでの話を聞き終えて義輝は、

「春は青か、東の方角、それに青龍が守護神であるか」と呟いた。

「上様の夢に何か因縁があるような気がしたのですが」

「よく分からぬが、四方神のことなら余も聞いたことがある。若菜、その絵をこれに持て」

「はい、直ちにお持ちします」

やがて持参した四枚の写し絵を若菜は義輝の前に広げた。ひと通り見終わって、義輝は青春・東方の守護神青龍に再び目をやった。天宙に雲を孕み、全身をくねらせ天を舞う青龍、正面を睨み、光る双眼、義輝は身動きせず見入っていた。義輝は昨夜の夢を思い出した、同じ内容なのだが、少しいつもととは違う感じの夢であった。だがまだよく分からない、若菜にはもうこれで夢の話は打ち切ることにした。

そうこう過ごす内に義輝に縁談が持ち上がった。武門の棟梁の身分ゆえ武家からの話もあったが義輝は固辞していた。いつか権力闘争の渦中に巻き込まれる事態を回避したかったのである。しかし今度は公家の名門近衛家との縁談であった。三好長慶が仲介して朝廷よりのお声掛けりとあれば、これは断る訳にはいかぬ事態となった。

正室となる娘は近衛植家の息女で名を桜子、十八歳であった。

「桜子、春の名か」

義輝は名に惹かれた。

……若菜はなんと言うであろうか。

義輝は若菜に対して後ろめたさを覚えた。義輝は若菜を愛していた。しかしお手付きの侍女ではない、それゆえに清らかなる心情を保ち、若菜とは強い絆で結ばれているはずであった。

「お受けあそばされますよう」

若菜は表情を変えず即答した。

「上様には誠に良きご縁かと存じます。一日も早くお世継ぎ様を生されるのが、天下万民のための急務と心得ます」

「そなたはどうか、それでよいのか」

「上様、私はこの身、上様に生涯尽くすと決めております。私は上様がお望みなればどこへも参りませぬ。御台様をお迎えしても、上様のお世話をさせて頂きとうございます」

「無論だ、そなたはどこへもやらぬ、許せ若菜」

その後、若菜は一言も発しなかった。侍女としての立場を貫くことで義輝に対しての思いを伝えていた。義輝は若菜の心の内を理解

していた。

二条御所に於いて、將軍義輝の婚儀が盛大に行われた。連日連夜に亘って祝儀の答礼で義輝は多忙を極め、まだ新妻の桜子とはゆつくり顔を合わすことがなかった。寢所でやっと二人になった時、義輝は桜子の顔を初めてまじまじと見た。色白で細く、小柄な娘であった。鎌倉以来の摂政、関白の家柄という名門近衛家の息女として、なに不自由なく大切に育てられた、そこはかとなない気品が漂う娘であった。天下に号令する武門の棟梁、將軍家御台には一寸荷が重そうでもある。義輝は一瞬考えた。

……この桜子には、迂闊に武家の仕来たりを押し付けられぬな。

「義輝である、今日よりそなたは將軍家正室桜子となった。慣れぬ武家に嫁いで苦勞も多かろう、なにかあれば遠慮のう余に話すがよい」

「桜子です。不束者ですがよろしゅうおたの申します」

世間から流れ公方と呼ばれながら、この先將軍復権を目指す義輝である。不測の事態はいつ起きるやも知れぬ身、その渦中に桜子を巻き込む訳にはいかない。守ってやらねば、と心中期する思いで桜

子の手を取った。桜子は義輝のなすがままに身を任せた。

書かずともよいことだが、義輝とて女が初めてではない。元服後、保護者である領主の命を受けて伽に上がる侍女は数名いた。しかしそれは義輝にとって新將軍として成長するための儀式のようなものであった。義輝が初めて胸を焦がすほどの想いを抱いたのは若菜であつた。

或る日、一条御所に珍しい人物が義輝に拝謁を求めてやって来た。行装いかめしく、大鷹三羽を先頭に据え、乗替馬三頭引かせ、門弟、兵士八十余人を引き連れての堂々たる上洛であつた。常陸国鹿島大掾家の臣、塚原土佐守高幹と名乗った。義輝はその名を聞いて驚いた。嘗て父義晴から古今無双の劍豪と聞いていたのである。義輝の前に平伏する白髪のお老武士を見て思わず問いかけた。

「世に名高い劍聖、塚原卜伝であるな」

「これは恐れいります、塚原新右衛門高幹、官位土佐守、号を卜伝と名乗りおります。上様のご尊顔を拝し奉り恐悦至極に存じまする」

「先ず用向きを聞こう」

「それでは早速ながら、我が主君大掾清幹の官位を、願わくば奏請

するものにござりまする」

塚原卜伝のそれについての長い口上が終わって、

「相分かった、其の方の願い必ず聞き取らす」

「おお、有難き仕合せ、主君に成り代わり厚く御礼申し上げます」

「ところで卜伝翁、代わりと言ってはなんだが、ちと頼みがある、

聞いてくれるか」

「上様のご所望の儀、承ります」

「余が父万松院（義晴）とは旧知の仲と聞いておる」

「いかにも御先代様とは縁浅からぬ身にござります。お若き頃京にて少々剣技のお手直しを致しました」

「聞いておる、その縁でこの身にも剣法を教えてくださいぬか」

「はて、上様には京流小太刀をご精進あそばしますこと、洩れ聞いておりますが」

「あれは守りの型のみに徹した演舞のようなもの、余は普通の立ち合いを望む。攻めも受けも習いたいのだ」

「さて、これはいかがなものか」

「聞いてくれ卜伝翁、余は流れ公方と蔑まれる弱き將軍である。武力を持たぬ身なれど、せめてこの身一つは強くありたいのだ。教え

ること叶わぬなら、せめて秘伝の一手を余に見せてくれ」

ト伝はじつと義輝の眼を見つめた後、暫く黙考した。そして、

「畏まりました、拙うはござるがこのト伝、上様に秘伝の一手御上覧仕ります」

塚原ト伝は、下総の剣祖飯篠長威斎家直の興した天真正伝神道流―香取神道流を学び、のちに鹿島新当流―これに自ら工夫を重ね新当流（ト伝流）を興し、古今随一と謳われる名人であった。その秘伝“一ノ太刀”は伝説となって世に広まっていた。

御所庭園内武道広場に、向かい合って立つ義輝とト伝。

「お好きなように構えられますよう」

言われて義輝は小木刀を手に京流の受けの型を取った。

「ではそれがしが先ず一太刀」

さっとト伝が近づく、得たりと義輝が受ける、筈であったが、鋭い音と共に小木刀が跳ね飛んだ。一瞬のことで義輝は何が起きたのか咄嗟に理解しかねた。

「今一度」

言われて小木刀を拾うと再び構え、ト伝の繰り出す木剣に備えた。

「参りますぞ」

ト伝の声が響き、さっと近づくとまたしても乾いた音と共に小木
刀が宙に舞った。

「今度はお体に参りますぞ」

小木刀を拾って身構える義輝、敵わぬまでも受けて見せる、そう
思い、ト伝の動きに全神経を集中する。ト伝がさっと寄る、受ける
筈の義輝の脳天に一閃、ぴたっと頭上でト伝の木剣が静止した。義
輝は声も無く呆然と突っ立っていた。やがて気を取り戻し、

「余は手も足も出ぬ、これ程に弱き腕前であったか」

と肩を落とした。

「上様に申し上げます、それがしの見るところ、上様のお手筋は悪
しゅうござりませぬ。いや、それより修練を積まれますれば剣技向
上は早いかと拝察仕る」

「誠か」

「上様には濁りなき天稟の才があるとお見受けしました。そも受け
の太刀、守りの型は、変幻自在の攻めの剣技を、修練に修練を重ね
て会得するものでござります。守るには攻めの技法を体得すべきか
と」

「成る程、攻めが守りになるのか」

「しかしながら上様は尊貴の御身、御自ら進んで先んじることとはできぬ身にございます。したがって攻め手の先を読んでの先手、つまり後の先にござります」

「攻め手の先を読んでの先手、後の先、そんなことができるのか」

「それがし、君命を受けての上洛ながら、これより伊勢の国司北畠具教様に秘太刀の伝授に参ります。長き旅になること主君にも伝えて出立しました、ゆえに少しばかりこの地にて逗留し、その間、上様に後の先の太刀を御伝授仕ります」

義輝の顔がみるみる喜びの表情に変わった。

「有難いぞト伝翁、いや、尊師と呼ぼう、これより尊師が剣法の師である。良しなに頼む」

言葉を変えてト伝に頭を下げた。

これより長きに亘り京に滞在した塚原ト伝は、毎日朝早くから陽が落ちるまで義輝に剣技の指導をした。剣聖の名を戴くト伝は、余程の相手でないと剣法を教示せぬ剣客であった。ト伝は義輝の太刀筋に天賦の才を見たのであろう、その指導は峻烈を極めた。義輝は生まれて初めて必死になって指導を受けた。やがてト伝が京を発つ日が迫った。

「短期にてやれるだけの攻撃、防御の技はお伝えしました。この上は、上様には日々鍛錬を重ねられますよう」

「もう別れの時が参ったか、心残りなれど尊師に学んだこと、この上なき喜びと誇りである」

義輝は感謝の言葉を述べた。

「旅発つ前に最後の一手、それがし考案の秘伝一ノ太刀を口伝にて御伝授仕る」

「誠か、世に名高い一ノ太刀を伝授してくれると申すか」

「上様、攻めの太刀筋は、いかに千変万化しようとも帰するは手に持つ一刀。太刀筋の先を見極めて後の先を取る、これが受けの太刀の真髄。このこと何卒お心に留め、努々お忘れなきように」

「尊師の教え、この義輝生涯忘れぬぞ」

「このト伝が上様に願うことは、上様が剣を抜かぬことにござります。不穩の動きあれば身を避けられるべし。不測の事態生じれば三十六計逃げるにしかず。剣を手に持つは最後の最後にござります。

上様の御身は上様お一人にあらず、天下万民のため、危険を避け御身永らえることにご専念あれ」

「重ねての教訓、よくよくこの身に沁みたぞ。尊師にはいつまでも

「壮健であることを祈っておる」

この後、塚原ト伝は、義輝に新当流の秘伝一ノ太刀を口伝にて伝授した。その翌日、ト伝一行は御所を辞し、伊勢国に向かって旅立っていった。

塚原ト伝の指導を受けて以降、義輝は一段と逞しい青年になっていった。元々歌を詠み、茶を好み、書に耽る、風流典雅な若將軍であったが、昨今はそれに骨太な劍客の様相も加わって、威風堂々他を圧する所作を見せていた。ト伝が在京中、出入り差し止めであった兵法指南、京流吉岡憲法直光は、そのまま御所から遠ざけられた。義輝はト伝の残してくれた劍の奥義を、一人にて究めようと日々鍛錬を重ねていた。

室町幕府將軍復権を目指す義輝は、武力を持たぬ身ゆえに、家臣の三好長慶の傀儡となる自分がいかに軍事力を得るかを考えてみた。長慶の幕政専横に憤る諸国の戦国大名の中には、義輝に同情を寄せる者も多数いた。義輝はそれらの大名に親書を送り、関係を強めようと精力的に活動を開始した。群雄割拠の戦国の常、領国領土を巡っての抗争を繰り広げる大名たち、それら抗争の調停に乗り出し

たのである。奥羽の伊達晴宗と植宗の権力争い、信濃を巡る武田晴信と上杉政虎、中国覇権を競う毛利元就と尼子晴久、九州侵略の島津貴久と大友宗麟、義輝はそれら抗争を政治的に治めることに力を注いだ。調停が功を奏すると偏諱として自分の名から輝の一字を与えた。大内輝弘、伊達輝宗、毛利輝元、のちに語る上杉輝虎などである。また義の一字は最上義光、島津義久、武田義信、朝倉義景、尼子義久などに与えた。こうした政治的努力が少しずつ実って六十余州の諸大名に義輝の存在を知らしめたのであった。

調停の御札として、九州北部の覇者大友宗麟から義輝に献上品が届けられた。種子島（鉄砲）であった。それには鉄砲と火薬にまつわる「鉄放薬方并調合次第」という秘伝書も添えられていた。

「上様、それは」

側において覗く与一郎に、

「これも献上品である。切支丹大名である大友宗麟から、天主教の僧侶が、余に目通り叶うなら献上すると交換条件を言ってよこした」

「種子島の取り扱い書でござりますか」

「うむ、秘伝書である」

義輝は鉄砲を自ら手に持ちその重さを確かめた。

「これが話に聞く南蛮渡来の種子島か」

義輝は早速、庭園内武道広場に特設の射的場を設けて、宗麟が派遣した砲兵と鉄砲鍛冶師に試射を命じた。鉄砲鍛冶師が丸薬を込め火縄を点火、受けて砲兵が構える、撃つ、耳を劈く轟音、弾け飛ぶ標的、火薬の焦げる臭いと立ち昇る煙の中、義輝は初めて見る武器のその威力に圧倒された。

「これからは戦の仕置きが変わるであろう」

義輝の偽らざる感想であった。

このことがあつてすぐの日、大友宗麟の添状を持って異人が御所の門前に立った。切支丹伴天連ガスパル・ビレラと名乗った。伴天連ビレラと異教徒邦人通弁一人は庭内に案内された。異人のビレラは紅毛で瞳が茶色、鼻高く長身であった。義輝の前に進み出で、恭しく拝礼し跪いた。謁見した義輝は初めて見る異相の異教徒僧侶に目を丸くした。

「余が將軍義輝である」

「初めて御意を得ますガスパル・ビレラでございます、お目通り叶い恐悦にござります」

「ほっほう、この国の言葉が巧みであるな」

義輝は感心して相好を崩した。この後ビレラは大友宗麟の添状を差し出し、数々の異国の品を献上した。義輝に問われるまま母国の話を多く語り、また自らは天主教の布教の願いを通弁を交えず義輝に熱く語った。

「興味溢れる話は尽きぬ、いずれまた話を聞こう。そちの望みは叶えられるであろう、だが時を要する、暫く待て」

「上様、本日はお目にかかれて嬉しゅうございました」

「また異国の話を聞かせてくれ」

「ありがとうございます、いつ何なりとお話に参ります」

新しきものに惹かれる義輝は、この異教徒をよく調べ上げ、やがて天主教布教の許可を与えたのであった。

そんな時、中央政権の実力者三好長慶を病魔が襲った。倒れて臥したまま起き上がること叶わず、長慶の代理として腹心の家老松永久秀が指揮権を発動するに至った。これより三好家中に不幸な出来事が頻発する。長慶の片腕として活躍する実弟十河一存、同じく実力者の弟三好実休が次々に変死を遂げる。三好家中の権力闘争で松永久秀が毒を盛って抹殺したとの噂が流れた。長慶は頼みの弟の相

次ぐ急死に危機感を抱き、急ぎ家督を嫡男義興に譲る決心をする。だがその義興も居城、摂津芥川山城にて大量の血を吐いて悶絶、毒殺であった。

ここにきて松永久秀の名が畿内を中心に広まっていった。いよいよ戦国の梟雄松永弾正忠久秀が政争の舞台に登場した。急浮上の松永久秀とは誠に謎の多い人物であった。出自は阿波とも近江とも言われ諸国を放浪し、商人に身をやつして財をなし、管領細川氏の被官三好長慶に仕えるまでその足跡は全く不明である。奸雄三好長慶にその才を認められ、懐刀として家宰にまで登りつめた。長慶の命で京の所司代、豪商が支配する堺の代官も兼任し、財を蓄え着々と家中の実権を握っていった。後世、斉藤道三と共に下克上を体現した梟雄として、その名を馳せることになる。女色に耽る、残忍、凶暴、狡猾な人物として諸侯に恐れられたが、反面、美男の聞こえ高く優雅な立ち居振る舞い、連歌に通じ、茶道にも長けた教養人であった。領国では善政を敷く為政者で、領民たちには慕われていた。万能の才があり、築城にもその能力を発揮して、居城大和信貴山城、多聞城には後世に伝わる我国初の天守閣が出現した。

嫡男義興と頼みの実弟二人の急死に、戦国の奸雄三好長慶は、不

起の身から衰弱が進み意識混濁の中、悶死を遂げる。すかさず松永久秀は養子の三好義継を立てて、それを傀儡として三好家の実権を掌握した。そして京を制圧、畿内一円に勢力を伸ばしたのであった。

二条御所に松永久秀が拝謁のため参上した。

「御所様にはお変わりなく御健勝の様子、久秀安堵仕りました」

「弾正、久し振りである」

「此度は三好家を相続なされた主君義継様に成り代わりまして、御機嫌伺いに参上仕りました」

「それだけではあるまい、話を聞こう」

久秀の切れ長の目が光り、彫りの深い顔に笑みを絶やさず、

「これは畏れ入ります、しからば申し上げます。主君義継様いまだ若年にて政まつりごとには不慣れにござります、よってそれがし義継様の代理にて幕政を見ることに相成り申した。さりながら、それがしはまだ内裏に昇殿を許されぬ身分、そのところを御所様にはお汲み取り頂き、それがしに然るべき官位の奏請をお願い仕る次第」

「成る程、そうであるか」

義輝は考えた、この久秀を一寸試してみようと思った。

「はて、其の方の昇任に当たる功績がどうも思い当たらぬが」

義輝は久秀に皮肉を浴びせ、その反応を見ようとした。すぐ顔色を変えるようなら今後それなりに扱い易いと見たのだ。

「はははは、いかにも功はござらん」

久秀はさも愉快そうに高笑した。

「畏れながら御所様、ここは出直すのが筋ではござるが、さはさりながら、そうも成らず」

久秀は手を額にやり、ぽんぽんと軽く叩いた。一寸おどけているようにも見えた。

「ではこれよりお役に立ちましょう、先ずは畿内あちこちに起きている内紛を鎮めます。治安大掃除の次に、畏くも帝のおわす禁裏邸館の修復、またここ二条御所の増築、他に堀の普請などにも取り掛かります。こんなところを早急に手配致しますゆえいかがでしょうか」

……やるな、これは手強い。

義輝は内心警戒の念を持ちながら、

「おお、それは良いことに気がついてくれる、流石は弾正、官位叙任のこと相分かった」

久秀が上機嫌で御所を辞した後、義輝は考え込んだ。

……あの男は油断がならぬ、これまでより事態が悪くなるかも知れぬ。諸国の心ある武将が自分に力を貸してくれるだろうか、急がねばならぬ。

この後、義輝の推挙で松永久秀は、朝廷より従四位下弾正少弼、山城守に任官され、幕政の実権を握り絶頂期を迎えていた。

久秀の専横振りを、指を銜えて見る思いの義輝に朗報がもたらされた。正室桜子が懐妊したのであった。そして十月十日とつきとおか後男子が誕生した。

「桜子でかしたぞ」

義輝は桜子に労わりの言葉をかけ、我が子を繁々と眺めた。

「上様、良き名をお考え下さりませ」

「うむ、そうだな、余の輝の字を幼名に付けよう」

義輝は生まれた子に輝若丸と名付けた。義輝は我が子には自分と同じ悲哀を味合わせたくなかった、無事平穏に育って欲しいと願った。その願いも虚しく、悲運が義輝を襲った。幼君輝若丸は育つ間もなく急逝してしまった。

……無念なり。

義輝は我が子の短命を嘆いた。それ以上に桜子は嘆き悲しみ、そのあまり気鬱状態になり、自室に閉じ籠ってしまった。それ以後義輝には病を理由に顔を見せぬようになっていった。

「やはり公家の娘だ、桜子は武門の家には馴染めぬようだ」

義輝は桜子が哀れに思い、そっとしてやることが最良であろうと考えた。

「若様を亡くされお悲しみの上様に、私はかける言葉もありません」
義輝の居室を片付けに現れた若菜であったが、それ以上一言も言えず押し黙って下がろうとした。

「若菜、桜子のこと頼む、好きなようにさせてやれ」

「はい、それはもう、御台様には今日も自室に籠られてじっと座っておられるようでございます」

「時が経てば様子も変ろう、そっとしておこう」

義輝は庭に目をやりながら若菜に言った。

「上様、私には御台様の気晴らしのお役目は務まりませぬ」

「分かっておる」

義輝は向き直り若菜を見た。二人の目が合い、暫く無言が続いた、ふと若菜が気がついたように、

「上様、夢はまだ続いておりましようか」

「昨夜、久し振りに見た、同じ夢だ」

「やはり何かの暗示なのでしょようか」

「そうかも知れぬ、だが若菜、近頃は何か違う感じなのだ」

「お聞かせ下さい」

「眼だ、一点の鋭く光る眼が少し悲しげに思えるのだ」

「光の筋は、その眼から放つ光は同じでしょようか」

「それはいつも通り余の胸を貫く、だが光を放つ前までその眼はなにやら悲しそうな、そんな気がする」

聞き終えた若菜は

「上様、夢の話は誰にも話してはおりませぬ、また何ぞありますれば私にお話し下さりませ」

「うむ、そなたしか知らぬことだ、また聞いてくれ」

義輝は若菜にそう言った後、

「そなたが側に居てくれるお陰で悲しみの気が紛れる、有難いぞ若菜」

「上様、気落ちなされず、お心強くあそばされますよう」

そう言って若菜は居室から下がっていった。

義輝は悲しみを乗り越え、將軍復権のため諸国の主だった戦国大名に親書を送り、軍勢を率いて上洛するよう要請した。だが答えは空しかった。中国の太守毛利元就は、天下を望まぬ家風を打ち立て、領国の維持に専念する始末、越前朝倉義景は上洛するようには見えなかったが、優柔不断で尻込みしてしまい、頼みは駿河、遠江、三河、三國の太守今川義元のみであった。

永禄二年、そんな時、若き武将が二条御所に現れた。尾張清州城主織田信長であった。少数の供を連れての密かな上洛である。謁見した義輝の前に平伏した信長は、

「織田上総介信長にござります、上様の御尊顔を拝し恐悦至極にござります」

と口上を述べた。目つきの鋭い、細身の体躯、甲高い良く通る声、聡明そうな顔、なかなかの偉丈夫である。信長は美濃斉藤道三の娘帰蝶を正室に迎え、その縁で道三と同盟を結んだ。力を得た信長は、織田一族の骨肉の争いの中、勝利を得て尾張一国を平定したのであった。義輝に拝謁した理由は、尾張守護職の承認とやはり官位の奏請である。

「尾張を平定したと申すか」

「御意、一族同士の寸土の争い、お見苦しき段お詫び申し上げます、なれどこのこと全て平らげましてござります」

「上総介、この次は単身ではなく、軍勢引き連れて上洛し余の力となれ」

「畏れ入りました、この信長、必ずや近い内に軍を率いて上洛を果たしまする」

「楽しみにしておる、余と其の方は歳が近い、若き力で世直しをしたい、待っておるぞ」

「はは、必ずやお心に添う働きをいたしまする」

力強く答える信長であったが内実は、斉藤道三亡き後、斉藤家とは同盟決裂して敵対関係に逆戻り、また東海の雄今川義元には背後から脅かされ、そう簡単には軍勢率いての上洛は難しい状況であった。義輝は朝廷に奏請して、上総介信長を従五位下弾正少忠に叙任し、守護職尾張守に任官させた。拜命を受けて信長は来たとき同様ひっそりと尾張に帰っていった。

入れ違いに今度は越後春日山城主上杉政虎が軍勢率いて上洛した。のちに謙信と号する政虎は正義の武将であった。義を重んじ、義の

ために戦う。軍兵は勇猛果敢、強漢無比、政虎のためには命を惜しまぬ兵たちであった。軍神の名で近隣諸国に恐れられる政虎だけに、松永久秀は争うことを避け、政虎に礼を尽くして歓待した後、領国大和信貴山城に引っ込んでしまった。知謀知略の奸雄久秀は、政虎が長きに亘って京に滞在することが困難なのを知っていた。領国越後には雪が降る前に帰るしかないのである。

「あの雪深い田舎者めが、そのうちすぐ帰っていくわ」

久秀はほくそ笑んでいた、すでに先を読んで無益な争いを避けていたのだ。

京に入った政虎は、二条御所近くの寺を本陣として宿営した。義輝の前に畏まった政虎は、

「上様のお健やかなる御尊顔を再び拝すること、この上なき喜びにござります」

と挨拶の口上を述べた。また一段と逞しい武将となった政虎を見て、

「政虎、よく参った、一瞥以来そなたの上洛を待ち望んでおった」

「松永弾正殿とは一合戦あるものと思っておりますが、拍子抜けしました」

「かの者は狡猾である、また穴から這い出て参ることだろう」

「戦となればひと思いに討ち取るものを、礼を尽くされて引つ込んでしまわれては、いかんともなし」

「争いを避けたは、いかにも弾正らしいやり口である」

「上様、この政虎、朝廷と將軍家のために粉骨砕身働きて、御守護仕ります」

「政虎、よくぞ申してくれた心強いぞ、余はおことに名を与えようと思う、受けてくれるか」

「これは有難き仕合せにござります」

「余の輝の一字を与える、これより輝虎と名乗るが良い」

義輝から偏諱を受けた政虎は、

「上杉輝虎、誠に良き名、大いなる喜びにござります」

こうして再会を果たした二人は、時を忘れて歓談するのであった。

翌日、朝廷を敬う政虎改め輝虎は、献上品を携え内裏に昇り正親町天皇に拝謁した。京に滞在中、洛内を奇麗に大掃除する如く治安維持に努めた輝虎は、久秀の指摘する通り、長きに亘って京に留まることは出来ぬ身であった。輝虎は信濃侵攻を巡って宿敵武田晴信、のちの信玄と、川中島を挟んで攻防を繰り返していたのである。ま

た上州路を目指して進攻する北条氏政とも熾烈な争いが続いていたのだ。もう秋も終わろうとしている、京に雪が舞えば、越後の国里は積もる。急いで帰国の準備に取り掛かった。

「輝虎、国に帰るか、心細くなるの」

「上様、それがし、いつまでもお側にいて力になりとうござる、しかし関東の守りのため帰らねばなりません。何卒ご理解賜りますよう」

「分かっておる、また上洛して余を助けてくれ、無事帰国して堅固で過ごせよ」

「上様も何卒御健勝にて、この輝虎いつでも上様のために尽くします、暫しのお別れにござります」

「そなたが帰った後、弾正がまたぞろ出てこような」

「恐れながら言上仕る、上様の御身に危険が迫ればいつそ越後に御動座なされませ、それがし越後にて上様をお守りし、他日を期して共に上洛を果たします」

「有難いが輝虎、余は最早流れ公方ではない、將軍は京に在ってしかるべし、何が起きようとも都を離れず、そう決めたのだ」

「弾正殿に不穩の動きあれば何となされます」

「戦うまでよ、余は一人でも戦う、死を恐れぬ」

「今はこれ以上申せませぬ、何卒御命永おんいづらえんことをお祈り致します。この輝虎必ずやまた馳せ参じまする」

悲運に敢然と立ち向かう孤高の將軍に、輝虎は涙を禁じ得なかつた。翌日、上杉輝虎は軍勢を引き連れて帰国の途についた。

案の定、輝虎が去った後、松永久秀は何食わぬ顔で京に上つてきた。御所に現れ義輝に拝謁し、

「いや流石は上杉輝虎殿、見事なる仕置きでござる。お陰で京都がまた一段と奇麗になり申した、また雪解けを待つて上洛して頂ければ有難い。これもひとえに御所様が諸侯にお声を掛けてくれた賜物、いや祝着至極にござります」

皮肉を込めて義輝に語った。

……おのれ、憎みても余りある奴。

怒りを胸に秘め、

「誠に輝虎は武人の鑑である」

と相槌を打って答えた。挨拶を終えて悠々と久秀は義輝のもとを辞していった。この後、義輝はまた以前のように悶々とした日々を送ることになった。

長きに亘って京に宿営し、久秀のような奸臣を追討してくれる武將の現れるのを義輝は待ち望んでいた。ようやく義輝の思いに応えた戦国大名が出現した。東海一の弓取りと言われた駿河、遠江、三河、三国の太守今川義元が、総勢四万の大軍を率いて京に向かって進軍を開始した。早馬の報せを受けて義輝の心は躍った。

「おお、義元が立ったか」

今度こそ、義輝の胸は期待で膨らんだ。だが虚しい結果が待っていた、この時も義輝の頭上の暗雲は晴れずに終わった。先年義輝に拝謁した尾張の風雲児織田信長が今川義元を討ったのである。今川義元京に向け進軍の報を受けた信長は、清州城内にて“幸若舞”声明平家物語平敦盛の一節を勇壮に謡いながら舞った。

「これより出陣」

信長の甲高い声が響き渡った。途中熱田神宮にて戦勝祈願、そこに集結した四千の軍勢をもって、今川義元の宿陣する桶狭間に逆落としの奇襲をかけ義元的首級を挙げた。義輝のもとに義元討たれるの報せが入ると、

「あの信長が討つとは皮肉なものだ」

義輝の落胆は大きかった。將軍復権を夢見る義輝の悲願はまたしても潰えたのであった。

数年の歳月が流れた。二条御所では義輝が憂さ晴らしに毎日木刀を振るい、弓を射って武道に打ち込んでいた。近頃では若菜も加わり、小太刀、薙刀両武芸の稽古に励んでいた。もう三十路を過ぎた筈なのに若々しく、昔の面影を留めていた。義輝の正室桜子は気鬱が益々度を強め、殆んど自室に籠り顔を見せない状態が続いていた。

「若菜、中々筋が良いな」

義輝が声を掛けた。

「上様、いざという時、お役に立ちたいのです」

「頼もしいぞ」

義輝は若菜に武芸の才があるように思えた。この時、側近の与一郎藤孝が耳寄りな話を持ってきた。洛内清水寺の近く、公家山科言継の屋敷に上泉伊勢守信綱が滞在しているとの情報であった。

「劍聖上泉伊勢守が京に来ておるのか」

義輝の顔色が変わった。

上泉伊勢守信綱は上野国大胡城主大胡武蔵守秀継嫡男として生ま

れ、伊勢の剣客愛洲移香齋に陰流刀法を学んだ。大胡改め上泉と称したのち愛洲陰流に更なる工夫を重ね、ついに新陰流の剣法を編み出したのであった。初めは秀綱であったが甲斐国主武田晴信の厚遇を受け、晴信の信の一字を授かり上泉信綱と名を改め伊勢守を名乗った。義輝の恩師塚原卜伝と上泉信綱は、二大剣聖として並び称せられ、古今無双の剣豪として世にその名を轟かせていた。

上泉信綱は興した新陰流を世に広めようと、東国から諸国武芸の旅に出た。尾張を巡ってから伊勢国司多芸城主北畠具教を訪ねた。北畠具教は剣技を好む大名として広く知られていた。塚原卜伝に新当流の印可を受けた剣豪でもあった。具教は上泉信綱の新陰流を見て、その見事さに打たれ、京に上ることを勧め、洛中に兵法所を構えて新陰流を広めることを提案した。そうして上泉信綱は門弟四人を伴い京に上って来たのであった。

「伊勢守信綱の新陰流を見たい」

義輝は喜び勇んで早速山科言継に使者を立てた。こうして二条御所内にて新陰流の上覧演武、剣技披露が催されるに至った。

義輝に招かれた上泉伊勢守信綱は、大広間にて拝謁の榮に浴した。信綱の後ろには四人の門弟が控えて平伏していた。いつも信綱に付

き従う二人、神後伊豆守宗治と信綱の甥に当たる疋田豊五郎景兼、そして新しく門弟に加わった丸目蔵人佐長恵と柳生石舟斎宗厳であった。柳生宗厳は、大和柳生の庄城主ながら師の信綱上洛の道案内として同行して来たのである。

「上泉伊勢守、我が恩師塚原ト伝よりその名を聞いておる、古今の名手である」と

「これは畏れ入ります、さりながらト伝殿には遠く及びませぬ。ト伝殿こそ天下の名人にござります」

「謙虚なる物言い、感じ入ったぞ、ト伝とは旧知の間柄と聞き及ぶが」

「それがしは上野の出、ト伝殿は常陸の出にて同じ東国でござる。鹿島、香取の地にて若き頃は共に刀術の鍛錬に明け暮れたことがござります」

上泉信綱は昔を懐かしむように淡々と語った。ト伝と同じように白髪であったが、すらりとした長身で高貴な品格を備えた穏やかな語り口の老師であった。

早速庭園内武道広場にて上覧演武が行われた。將軍御座所上座に義輝が座り、近臣たちは左右に並び、庭内でも警護を兼ねた家臣た

ちが演武を見学した。先ず新陰流剣技の基本型が披露された。打太刀は神後伊豆、疋田豊五郎ではなく新参の丸目蔵人佐を信綱は選んだ。受太刀の信綱は新陰流の基本型から始まり奥義の秘太刀、猿飛、天狗抄などの精巧な組太刀を、一太刀一太刀渾身を込めて受けては打ち込み、その身のこなしは衆目には神技と映った。

演武が終って義輝は自ら一手指導を申し入れた。信綱は快く受け入れ、両者向き合い礼の後、立ち合いに入った。ゆっくりと上段に構えた信綱に正眼で迫まろうと義輝は間合いを詰める。だが信綱が仁王の如く大きく見え、動きを止めた。寸分の隙も無い、これは打ち込めぬと見た義輝は受けの構えに変えて、先手を誘い後の先を狙った。信綱の身がすっと近づく。信綱の掛け声と同時に太刀が走った、来た、この機を待つ義輝が同時に打ち込んだ。義輝の太刀が空を斬って流れ、一瞬の速さで信綱の木剣が義輝の頭上で静止した。完敗である。

「今一度」

涼しげな眼で信綱が促した。再び立ち合い、結果は同じであった。義輝の受太刀は外され、崩れた義輝の右肩上に信綱の太刀が静止していた。

「今一度なされませ」

義輝は額から流れる汗にも気付かぬほどになっていた。恩師卜伝の名誉に懸けて、敵わぬまでも一太刀打ってみせる。義輝は必死に構えた、信綱の身が動き太刀が走った、太刀打ち音が激しく響き、義輝の太刀が弾かれ、崩れた体勢の義輝の左肩上に信綱の木剣が静止した。

「参った、とても敵わぬ」

「只今のは新陰流秘伝の内にござります」

と信綱は跪き答えた。義輝はにっこり笑い頷いた。

演武披露を終えて、信綱と門弟たちは広間にて歓待を受けた。

この席上、義輝は上覧演武を披露した伊勢守信綱と打太刀を務めた丸目蔵人佐に感謝状を贈った。現存するそれには、

“上泉伊勢守の兵法は古今比類なし、天下一と請う可し。並びに丸目蔵人佐の打太刀これまた天下の重宝と請うべきものなり。足利

義輝 花押”

と書き記されていた。

「伊勢守、本日は大いに感じ入った」

義輝の言葉に、信綱は、

「流石はト伝殿が天稟の才ありと見抜いた上様、太刀筋は大変よろしゅうござる」

と義輝に答えた。

「何を申す、余は何も出来なかったではないか」

「あいや、さにあらず、一瞬の反応にござる。ト伝殿の直感とそれがしは同じでござる」

「伊勢守、暫くここに逗留し、余に手直しをしてくれぬか」

「はて、尊貴の御身にそれがはたして良きことか、考えるところにござります」

「ト伝師も同じことを申した。だが余は將軍ながら武力を持たぬ、せめてこの身だけでも強くなりたい、頼む、教えてくれい」

義輝の懇願に信綱は暫く黙考した、ようやく目を開けて、

「西国に回る旅なれど、暫く京に留まりて上様の御指導に当たります」

と応えたのであった。

こうして義輝は、信綱と高弟神後伊豆、疋田豊五郎の手ほどきを受けることとなった。

「ト伝殿とそれがしとは教え方が異なっても、帰するところは同じ

受けの太刀。ト伝殿の薫陶を受けた上様と雖も、修練に於ける相手不足で前に進めなかったのです」

信綱は直接立ち合わず、神後伊豆を打太刀にして、受太刀の義輝を側面から指南した。こうして時には信綱が他国に出かけても神後伊豆と疋田豊五郎を残し、また戻っては再び指導をしたのであった。

信綱は義輝に初めて拝謁した時に何か不吉なものを直感した。将軍家の身に危険が迫っている、そのような予感がした。これはやはり防御の剣技を伝授しておこうと決意したのであった。

「わしの勘が外れると良いが」

高弟二人にはこのことを打ち明けた。

「わしの留守中も二人して怠る事なく御指南いたせ」

信綱はこの言い知れぬ不吉な予感が的中することを恐れた。

かれこれ一年近く月日が流れた。信綱師弟が京を離れる時が来た。

「尊師伊勢守、今日までよくぞ根気よく指導してくれた、礼を申すぞ」

「上様、この短い期間によくぞここまで修行なされました。それが去っても何卒修練怠りませぬよう」

「うむ、日々精進致す」

「いずれ一国一人の印可を伝授する日も参りましょう」

「尊師、それはあるまい」

「いや、このまま御精進あそばすなら京に於いては上様の印可となりましょう」

「その言葉を励みと致そうぞ」

「この信綱の願うところは、上様が太刀を振るうことの無きこと、そのみにござります。上様は万民の上にあらせられる身、何卒、身の危険を回避され御命永らえんことを願うものにござります」

師の信綱は、ト伝師の別れの時と同じことを義輝に言った。こうして新陰流受太刀の秘伝を授けて、上泉伊勢守信綱と門弟たちは京を離れていった。

余談になるが、上泉信綱はこのち將軍足利義昭の代に再び上洛し、従四位下武蔵守の叙任を受け禁裏に昇殿を許された。正親町天皇に拝謁して京都御所庭前にて天覧演武に供し、その盛名と流儀を天下に知らしめることになる。

この年の暮、松永久秀は三好家の重臣、三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助友通、世に言う三好三人衆を伴い二条御所に

参上した。久秀は恭しく拝礼した後、重大なことを義輝に言上した。

第十代将軍足利義材の養子で、義輝には叔父に当たる阿波公方足利義維の子義栄を養子に迎え、次の将軍に据えるように要請したのである。

「従兄弟の義栄に将軍を譲れと申すか」

義輝は顔色を変えた。

「御意、阿波におわす義維公は、御先代万松院様（義晴）の時、将軍に推戴されましたが果たされず不遇を託っておられました。何卒、御所様の御厚情を持ちまして、その御子義栄様に将軍譲位されんこと、管領代のそれがしと三好家の重臣三人衆の願望にござります。

何卒このこと御勘考されますこと伏して御願ねんい申しあげます」

「黙れ弾正、叔父義維殿が将軍位に就けなかったのは朝廷が認めなかったからであろう、筋違いの話だ、譲位は出来ぬ、退位もせぬ、下がれ」

「御所様、これは我ら幕政を司る者の合議の上の要望にござります、重ねてお願い致します」

「弾正よ、いっそ余を討ってはどうか」

義輝はにやりと笑って久秀に言った。

「滅相もござらん、この弾正なんで公方様を討てましようや」

久秀も気色ばんで答えた。義輝は立ち上がった。

「如何にも公方殺しは天下の大罪である。だが言っておく、構わん討つがよい、余は最早流れ公方ではない、京を離れず、近江にも落ちぬ」

そして愛刀に手を掛けた。

「いつその場で余を討つがよい、おことたちは戦場往来の豪の者、敵わぬまでも一太刀報いて刺し違えようぞ」

一喝された久秀と三人衆はたじろいだ。二人の劍聖に劍技薫陶を受けた義輝に、侮り難しと察した久秀は、

「あいや、それはなりません。我ら一同下がって再度熟考致します、御所様の良きように取り計らいまする」

四人は逃げるように御所を辞していった。

その夜義輝は一人考えた。

……あの弾正はおめおめ引き下がる男ではない、義栄を担いだ以上いずれこの御所に兵を差し向けて退位を迫ることは必定、拒否すれば命は無い。朝廷に新年拝賀を迎えるこの時期は襲っては来まい、年が明けて春であろうか。面白い、自分の好きな春に最期を迎える

のも一興。

義輝は不思議に死の恐怖を感じなかった。

年が明けて永禄八年、松永久秀は御所にも顔を見せず、新しい居城大和多聞城に籠って一步も出ず、不気味な静けさでかえって何かを期する気配を感じさせた。義輝は久秀の動向を探るべく細作を放っていた。与一郎始め従臣たちは久秀の魔の手から義輝を逃れさせようと將軍御動座を勧めた。

「余は動かぬ」

義輝の決意は固く、家臣たちは困惑した。与一郎は必死になって、「上様、今一度ご再考を、今なら充分にいずこなり落ちられます。

何卒天下のため御命を永らえて他日を期して下さりませ」

「敵がまだ動かずにおるのに逃げ出しては天下の恥さらし」

義輝の意志は固く梃子でも動かうとはしなかった。こうして静かなる内に春を迎えた。

三好家や久秀の領国、河内、山城、大和周辺に放っていた細作から情報が入ってきた。久秀の意のままに操られる三好家当主義継の居城河内飯盛山城に、阿波公方足利義維と嫡男義栄が入城したとい

う。また久秀の前の居城大和信貴山城からは、久秀嫡男久通が手勢を率いて京に向かう気配ありとの報せも入って来た。義輝は側近の与一郎や近臣たちに命じて、京都周辺の大名たちに援軍要請の使者を出した。

「管領代松永久秀に謀反の動きあり、至急派兵して二条御所の護衛を願うものなり」

援兵依頼された各大名たちは一応に、

「今の二条御所にては警護しかねます。三好、松永軍とは衆寡敵せず、戦わずして落ちられるべし」

こんな答えが返ってきた。

「再び流れ公方になれと言うか、我が天命ここに極まれり」

義輝はそう叫ぶと居室に籠り考えを凝らした。

……弾正が義栄を推戴するからには、我が血統は絶やされる。自分と弟二人も殺害されるだろう、老衰で寝たきりの母慶寿院はとても逃げられない、病の桜子は救わねばならぬ、若菜はどうする。

そして与一郎のことが浮かんだ。

……自分の元服の日、父万松院は、与一郎は足利の血筋であると打ち明けた。細川一門ではなく我が血筋なれば救わねばならぬ、そ

れが亡き父の願いでもあろう。

義輝は重い足取りで奥院に入っていった。生母慶寿院は眠っていた、大分以前から意識は無く深い眠りに就いて天に召される時を待っていた。義輝はそつと母の手を握り、別離の言葉を残し部屋を出て行った。

翌日、義輝は細川与一郎藤孝を側に呼んだ。

「君命である」

義輝は有無を言わさぬ口調で与一郎に言った。

「与一郎よ、そちに重大な任務を命ずる。これより御台桜子を親元近衛家に送り届けよ。この御所はすでに弾正の手の者に見張られておる、悟られずに落ちよ。またその後この御所に戻るを許さず」

「何故戻る事、叶いませぬか」

「聞き返すす和一郎を義輝はきつと睨み、

「御所にては死あるのみ、そちには生きてやって貰うことがまだある。洛内鹿苑寺の周嵩を先ず救出せよ、いずこなりに匿った上、奈良興福寺一乗院に走り、覚慶も他国に逃がしてくれい。二人の弟の命そちに託す、生きて我が足利の捲土重来を期す支えとなってくれ

い」

「上様、それがしは上様の死出の旅にお供仕ります」

与一郎は目に涙を浮かべ訴えた。

「断じてならぬ、与一郎よ、この任務そちを措いて他におらぬ、余の願い叶えてくれよ」

「おめおめ生き永らえませぬ。ぜひともお側にて」

「君命である、与一郎これを取らず」

義輝は腰の脇差を抜いて手に持ち与一郎に差し出した。受け取る
与一郎に、

「余の愛刀栗田口吉光である、そちに遣わす。長きに亘ってよくぞ
余に尽くしてくれた、そちの忠節死しても忘れぬぞ」

与一郎は肩を震わせて受け取り、主君義輝の特命を受けたのであ
った。

この後義輝は正室桜子の居室に急いだ。桜子が嫁ぐ時、近衛家か
ら付けられた侍女に、重大な話があるので室にて待つよう伝えてあ
った。病気がちの桜子は身繕い整えて義輝を待っていた。桜子は側
近くに仕える侍女たちから今置かれている状況を知らされていた。

恐怖に怯えた表情が顔にありありと出ていた。

「入るぞ」

現れた義輝を見て桜子は手を付き、着座するのを待って、

「病のため御尊顔を拝さず御無礼致しております」

と震えるか細い声で言った。

「そのことはよい、それより重大なる事態、聞いておろうな」

「上様、私は死ぬのが恐ろしゅうござります」

桜子は將軍正室の身なれば一人逃げ出すこと叶わず、主と共に死ぬ覚悟、このことに怯えていた。

「桜子、死ぬことは誰でも怖いものだ」

義輝は落ち着いて桜子に語り掛けた。

「だが案ずるな、そなたは死なぬ」

義輝は静かに桜子の側に近寄り、

「これより与一郎が護衛となり、そなたを親元近衛家に送り返す」

桜子は顔を上げ義輝を見た。

「私は助かるのでしょうか」

義輝は頷いて、

「共に死ぬことはない、弾正とて女子のそなたに危害は加えまい、

案ずるな、そなたは助かる」

桜子の顔に死を免れる喜びの色が浮かんだ。

「桜子、慣れぬ武門の家に嫁いでさぞ苦勞したであろう、よくぞここまで余に尽くしてくれた。そなたは生き永らえて、余の菩提を弔ってくれ」

桜子は、はらはらと泣き崩れた。

「急ぎ、身支度せよ、今宵の内に御所を去るのだ」

「上様、お聞き下さりませ、この桜子は、御台の身で何一つ上様のお役に立てませんでした。そんな私ですが、いついかなる時でも上様をお慕いしておりました。臆病な私をお許し下さりませ。どうぞ上様も、生きて下さりませ、後生でございませ、生きて下さりませ」泣きながら義輝に縋った。義輝は優しく桜子の手を取り、「余の身を案ずるそなたの心、有難く受けるぞ。桜子、そなたの名の通り、この身にも春があった」

この夜、正室桜子と侍女たちは、細川与一郎と手の者たちの先導で、二条御所裏門から悟られずに落ちていった。

義輝の寝所には花が活けてあった。もうこの時期にしては遅い水仙である。

……水仙、若菜か。

義輝は静まり返った室内で若菜のことを考えた。

……明日話そう。

そう呟いて眠りに就いた。

永禄八年五月、松永久秀の号令により、三好義継自ら手勢を率いて居城を発つ、三好三人衆もそれぞれ兵を繰り出す。最後に久秀嫡男久通が京に向けて出陣し、京都加茂川三条河原にて全軍集結した。

この時までには、義輝の警護の兵の中には逃げ出す者も多くいた。いまや義輝の身を守るのは僅かの従臣たちと女房衆のみとなっていた。従臣たちは武門の棟梁、將軍を見限って逃げたとあつては後世の物笑い、主君と共に潔く戦って散ることと覚悟を決めていた。義輝は一人居室にて酒を楽しんでいた。若菜が声を掛けて入ってきた。

「お呼びでございますか」

ふと義輝の空いている杯に気付き、側に来て酒を注ぎ足した。

「若菜、今なら間に合う、逃げよ」

若菜は目を細め、

「私は上様のお側を離れませぬ」

と微笑みながら言った。

「このような運命、さぞかし恨むであらうな」

「何を申されます、このような運命に感謝こそすれ恨みなどありません」

「短い生涯であつたが、若菜、そなたと出会えたことが唯一の喜びであつた」

「私こそ上様と共に死ぬる喜び、それのみに浸っております」

若菜は義輝を見て答えた。義輝は若菜から目を離さず、杯を置いて手を延ばし、若菜の手にそつと添えた。そして優しく握つた。若菜は一寸身を引きかけたが、そのまま義輝に手を預けた。

「死を前に、今こそそなたに打ち明ける、若菜、そなたこそ我が最愛の女子である」

「上様」

若菜はそれ以上言葉にならず、義輝を見た。

「今こそ、そなたと契り、共に死のうぞ」

「上様、私も、上様が生涯のお方とお慕いしておりました」

「若菜、許せ」

義輝は若菜を引き寄せ、ひしと抱きしめた。

二人の時間が過ぎて、義輝は用意してあつた筆硯を取り寄せ、貰い

受けた若菜の小袖を足元に広げた。義輝は筆を取り、墨を含ませてゆつくりと小袖の背に文字を書いた。傍らで若菜は不思議そうに、じつと義輝の筆遣いを見ていた。書き終えて義輝は若菜に振り向き優しく言った。

「これを掛けよ」

若菜は頷くと小袖を衣桁に掛けた。

「上様、これは」

若菜が問うた。

「辞世の句である」

〃五月雨は 露か涙か不如帰 我が名をあげよ 雲の上まで〃

義輝と若菜はじつと墨文字を見つめていた。

永禄八年晩春、後世に伝わる〃永禄の変〃が起きた。松永久秀の指令の下、京に集結した総勢二千の討手は二条御所を目指して進撃を開始した。総大将には三好義継を担ぎ副将は松永久通、同じく三好三人衆、ひた走りに二条に入り御所周辺を全て取り囲んだ。朝から降り続いた雨は折しも止んでいた。

御所内では今朝、義輝の生母慶寿院が息を引き取った。母を看取

った義輝は、

「母上も死出を共にしてくれた、もう思い残すことなし」

と言って目を閉じ、合掌した。この後義輝は従臣たち、女房衆を大広間に集め、これまでの忠義を謝し、労いと別れの言葉を掛けた。

「女子供たちはこの後落ちよ、弾正方は危害は加えぬであろう。残る忠義の臣たちは余と共に死に花を咲かせようぞ」

そして義輝は名残の杯を忠臣の一人一人に授けた。受ける忠臣はそれぞれ名乗り、拝礼して警護の持ち場に走り去った。義輝の側には若菜が白装束に襷掛け、手に薙刀を持って控えている。義輝は、足利家伝来の宝刀や自分が手に入れた天下の銘刀の全ての鞘を抜き払い、庭内に下り立ち自分の周りを取り囲むように円形に突き立てた。相模、岡崎正宗、山城、栗田口吉光、備前、長船長光などの銘刀が義輝を囲んで突き立っている。

「これでよし」

義輝は若菜を振り返り、にこっと笑った。

御所内水を打ったような静けさに警戒を強めて突撃命令を躊躇していた三好義継に代わって、松永久通の号令で攻撃が開始された。襲撃に備えて俄かに築いた櫓門を射手の兵士が掛矢で打ち壊しにか

かった。塀を乗り越え、他の兵士も中に飛び込む。とうとう門を打ち破って射手の本隊が館内に雪崩れ込んでいった。必死に守る将軍方忠臣たちは奮迅の働き振りを見せるが、衆寡敵せず次々に斬られ、突かれ、倒れていった。

「おお、公方様はあそこにおわす」

敵兵が叫んだ。義輝と若菜が庭に立っていた。兵士の一人が名乗った。

「三好家中、柳田新左衛門にござる。君命により御命廃し奉る」

「推参なり奸物ども、我は只一人、多勢にて討つは恥と知れ、武士の名を惜しむ者は一人ずつ参れ」

不敵に叫んで、義輝は愛刀を大上段に構えて心気を整えた。取り囲んだ敵兵がじりじり迫り、柳田新左衛門と名乗った男が、

「御免」

と叫んで斬り込んだ。義輝の振り被った上段から一閃の光の筋、斬り込んだ柳田新左衛門の首筋から鮮血が噴き上がり、倒れ込んだ。取り囲む兵士たちは一瞬の凄惨にぎよつとして凍り付いた。じりじりつと間を詰め、また一人が斬り掛かった、義輝は上段から身を捻つてまた一太刀、一瞬の閃きの中、具足ごと斬られた兵士がぎやつと

悲鳴を上げて絶命した。

義輝は素早く太刀を放り投げて、足元に突き立ててある銘刀の一本を引き抜いて再び上段に構えた。ちらつと若菜の薙刀を振るう姿が映ったが、すぐ視界から消えた。逸る敵兵たちは次々に斬り掛かっていった、義輝は雑念を払い、討ち掛かる兵士の太刀筋だけに全神経を集中した。義輝の夢中で振るう太刀を浴びて兵士があちこちに倒れ伏していった、その殆んどが頸、肩から胸にかけて具足ごと断ち斬られていた。

……これが後の先か。

義輝は、師塚原ト伝秘伝新当流受けの太刀を実戦の中で開眼した。敵兵の武器は槍に替わった。これを見て義輝は、また太刀を敵兵に投げつけ、その隙に地に立つ二本目の銘刀を引き抜き、

……次は新陰流猿飛を試さん。

死の恐怖より秘伝の実践に義輝の心は躍った。返り血を浴びて朱に染まる白装束の義輝の身体が右に動き、左に回る、槍先をかわして相手に飛び込み斬り伏せる。すぐさま三本目の太刀を引き抜き、師上泉信綱秘伝新陰流飛燕の太刀捌き、次々に迫る敵兵の槍をかわして斬り倒す。四本目、五本目、天下の銘刀を使い果たすまでに十

数名の敵兵が義輝の前に倒れ伏した。だが討手が益々増え、弓隊が現れたのを目にした時、

……最早これまで。

義輝は死を覚悟して館内に飛び込んでいった。敵兵と切り結んで館内に押し込まれた若菜を、義輝は惨劇の中に目にしていった。

「若菜いずこ」

義輝は名を呼んで若菜を探した、奥院に走りこんだ時、見つけた。

若菜は純白の装束を朱に染めて倒れていた。すでに息は無かった、

義輝は太刀を置き合掌した。

「若菜、余もすぐ参る」

敵兵が迫り来て取り囲んだ。義輝は太刀を掴み若菜の前に立ちはだかった。館内長槍は使えず、太刀でも敵わずと見た敵兵の中に数名、板戸を立てて迫るものがいた。弓隊がその背後に付き、矢を振り絞った。

一筋の光が義輝の胸を貫いた。

……また夢か。

天は晴れ渡り一点の曇りなし、地は淡く光り無限の数の桜花が大

河となって、たゆたうようにゆっくりと、時空を超えてうねり流れ
ている。この世には無い美しさの中に自分は立っている。晴天の中
央に墨痕一滴、黒雲が浮び出でて渦となって、みるみる広がり天は
墨色に転じる。真つ黒い渦雲の中心に点が出現した。その点が光り、
眼のように見えてくる。鋭く睨まれて、また金縛りになり身動きで
きない。

……いつもの眼だ、いやなにか違う、悲しげな眼だ。

その時、一点の眼がもう一つ出現した。双眼となり正面を見据え
た。光りを帯びた双眼。

……青龍、東方の守護神青龍の眼、そうであったか。東方は青春、
春の守護神青龍よ、我を春の世界に連れてゆけ。

一閃の光が点から放たれ胸を貫いた。その瞬間義輝の身が宇宙に
浮き、黒雲の点に向かって飛び去っていった。

従三位征夷大將軍 足利義輝 享年二十九歳

完

